

疫病・災害・戦争の記録と記憶

サミュエル・ピープスの日記を中心に

福士 航

サミュエル・ピープスが経験した1665年のロンドンでのペスト大流行、1666年のロンドン大火、第二次英蘭戦争における1667年のメドウェイ河での大敗北などの記述をきわめて素朴に読めば、疫病への対応や、災害後の心の傷、議会による失態の追求を受けるストレスなど、個人的な記憶が彼の日記に書き込まれている。しかしながら、本報告では、ピープスの日記に「個人的記憶」と「集合的記憶」と「国家的記憶」の三つの枠組みが現れることを論じた。

モーリス・アルヴァックスの定義する集合的記憶とは、「個人的な記憶でさえも社会的な関係の中で構築・獲得されることが強調され」（三村117）る枠組みである。通常は、「国家は個人からあまりに隔たりすぎている」ために、記憶の形成において個人が参照するようなフレームとはならないというのがアルヴァックスの見立てである（アルヴァックス 84）。アルヴァックスにとっての集合的記憶とは以下のようにまとめられる。「あらゆる社会は多様な集団から構成されている。そして階級や組合 [アソシエーション]、法人、家族といった個々の集団は、そのメンバーたちがしばしば長い時間をかけて作り上げた、それぞれ独自の記憶を持っている。社会的記憶は集団とともに常に変化し続けている。」（ホワイトヘッド 176-77）アルヴァックスはまた「実際、集合的記憶はたくさんある。この点が、歴史と区別される第二の特性である。歴史は一つであって、一つの歴史しかないといえる」とも述べている（93）。アルヴァックスに従えば、歴史とは一つのナラティブに収斂するものであるのに対して、集合的記憶とは複数あり、集団によって語られるナラティブが異なる。アルヴァックスが「歴史的記憶」と呼んでいたものを本報告では「国家的記憶」と読み替えた。

きわめて素朴な立場からみた「個人的記憶」と、アルヴァックスの言う「集合的記憶」、つまり親密な集団において共有される記憶とそれを語る枠組み、さらに単一のナラティブに収斂していく、国家に関わる記憶の枠組みとしての「国家的記憶」の三つが、ピープスの日記において交差する様子を確認した。また、文学、とくに演劇が、ピープスの記憶と交わる点に注目し、単一のナラティブを志向する「国家的記憶」が、いかに個人的あるいは集合的記憶と交渉し合う関係にあったかを本報告では示した。

1. ペストの記憶

「個人的記憶」と「国家的記憶」とが交差するのが、国王が定めた「ペストのための断食日」の記述である。ピープスがペストのための断食日の日記に書き記していることは、「金の勘定」であり「1,900ポンドほどの貯金」を確認して小躍りする様子である。（*Pepys's Diary* 1665 2 August）一方で、国王による布告は、神頼みによってペスト終息を祈る一文で締めくくられる。記憶という観点から見れば、この布告は「国民的記憶」の形成という意味も果たしたと言えよう。ただ、いち小市民ピープスにとっては、「国家的記憶」やそのイデオロギー国家装置としての断食という儀式は重要でないように見える。国民の苦しみの記憶を共有する一日の記録に、自分の金儲けの成功を神に感謝する、個人的記憶の記録を淡々と書き残すのみだからだ。

ピープスが書き残したペストに関連する記述の中で、もっとも彼の心がかき乱されて見えるのは、集合的記憶が関連する箇所である。自分の従者、いつも乗せてもらう船頭、召使いの家族など、親密な集団で共有される身近な人間の死をひとつづつ思い出し、パセティックに記録している箇所（1665 14 September）には、アルヴァックスのいう集合的記憶のフレームが作用していると言える。

ピープスの日記で、ペストに関する記述の終わりは、雪の積もった日に妻と教会を訪れる場面になる（1666 4 February）。記憶が場所と関連することはつとに論じられている（三村 第3章を参照）。多すぎる死者のために土が盛り上がった墓地という、まさにペストの記憶を伝える場所に降った雪が、恐怖の記憶を呼び起こさずに済んだように、これ以降、ピープスの日記にペストの記憶が書き込まれることはない。

2. ロンドン大火

1666年9月2日の深夜に発生したロンドン大火に関するピープスの日記の記述において、記憶という観点から興味深いことは、ピープスは明らかに災害後トラウマ的状态に陥っているということである。大火から約半年後の1667年3月24日の日記までの間に、火事の夢を見て、あるいは小規模な火事を目撃して、あるいはこれといった理由無く火事の恐怖を思い出して寝付けないという記述が7回繰り返される。ホワイトヘッドによると、トラウマ的記憶が人文学の俎上に載るのは19世紀後半から20世紀にかけてであり、PTSDというカテゴリーが導入されたのは1980年のことである（第3章参照）。しかしながら、ピープスの記述を読む限り、

災害によってトラウマ的記憶を抱えることは、おそらくかなり普遍的な現象なのだろうと推察される。

3. 英蘭戦争と内乱の記憶

1667年のメドウェイ河での大敗北を記憶という観点から読むときに、それに先立つ内乱の記憶が、どのように継承あるいは断絶されているかを確認することが必要である。国を失うのではないかとまでピープスが日記に書き込んだ大敗北が、王政復古によって「単一のナラティブ」から押しやられたオリヴァー・クロムウェルのことを、再び多くの人びとの記憶に甦らせたと、ピープスは日記に記述している(1667 12 July)。

チャールズ2世は、国王としてイギリスに復帰するに当たり、オリヴァー・クロムウェルらが主導した内乱を完全に忘却するナラティブを提示した。ブレダ宣言の末尾には「余の治世12年目の1660年4月4日」と日付を入れており、先王から国を受け継いだ正統なイングランド国王として統治を続けていたのだという「物語」を提示している。ブレダ宣言で発表された「忘却」のナラティブは、1660年8月に発布された大赦法にも引き継がれ、国会内での国王のスピーチでも繰り返されたことがピープスの記述からわかる(1663 27 July)。

国王主導で提示された国家的記憶あるいは忘却と恩赦のナラティブは、しかしながら、ピープスを含む国民の集合的記憶を書きかえられていない。国家的記憶を形成する儀式として、王殺しと認定されたクロムウェルらの死体が墓から掘り起こされ、絞首台にかけられ、その場に埋められることが議会で決定されたことを受けて、ピープスは「彼ほど大いに勇敢だった男が、このような不名誉を受けることは、わたしの心を悩ませる。」(1660 4 December)と、クロムウェルへの同情を示していた。*Oxford DNB*によると、ピープスは同郷の先輩だったオリヴァー・クロムウェルに終生変わらぬ憧憬を抱いていた。言葉を変えると、彼の集合的記憶には常にクロムウェルへの思慕が含まれていたと言えよう。実際、クロムウェルへの讃辞は、メドウェイ川での敗北以来、さまざまところで語られていた(1667 8 February)。国民の集合的記憶のなかに、クロムウェルは忘れられずにいたのだ。

一方で1660年代に上演された内乱期を題材にとった作品は、まさにイデオロギー国家装置としての劇場というに相応しく、内乱期に苦境に陥った王党派をヒロイックに描き、議会派を単純な悪役に描くことで、現体制の正統性を言祝ぐ物語を提供する。Edward Howardの*The Usurper*では、王位篡奪者Damoclesとその腹心Hugoの悪党ぶりが際立ち、彼らの破滅と正当な王の復帰という、明らかに護国卿政権の崩壊と王政復古を下敷きにしたプロットが特徴である。王位篡奪者とそのパラサイトに対して観客の嫌悪感を喚起しようとする場面で、直近のペストの記憶が用いられている。悪役Hugoが“Come let me see your Bill of Mortality: How many / Have dyed this week of the Bloody Sweat?”(13)と、ペストの記憶に直結する死亡統計に言及し、自分たちに敵対する勢力の死者数を見てほくそ笑むこの場面では、観客に悪感情が喚起されたことは想像に難くない。また、Damoclesがベッドの上で死ぬという幸運を得たとしても、民衆は墓を降り起こしてあなたを絞首刑にかけようとするだろう、とHugoが語る場面(41)は、明白にクロムウェルの成り行きを下敷きにしている。劇のエピローグでは、この劇の寓意が端的に語られる。“Let him [the Usurper] dye often, He’s content that way, / Still to be punish’d, so you’l spare the Play / Which by our Authors aim was meant to be / Here, a Record of all such Loyalty;”と、この劇が示そうとしたのは忠誠心Loyaltyであると明記し、さらに“that after long Contests, did safely bring, / Subjects to Rights, and to his Throne our King.”(The Epilogue to *The Usurper*. n. pag.)と、正当な王の復権を言祝いで劇は終わる。この劇が明白に打ち出すメッセージは、「国家的記憶」としてチャールズ2世が打ち出してきたナラティブと合致する。イデオロギー国家装置としての劇場が、時の権力者の発する物語を再生産する様を、この劇テキストを通じて我々は目撃する。

しかしながら、この劇に関するピープスの記述からは、国家的記憶とピープスの所持する集合的記憶とが、再びピープスのなかでせめぎ合う様子が見て取れる。劇そのものはとてもよかったが、「クロムウェルとヒュー・ピーターズに似せようとしたところは除く。そこは極めてくだらない」(1668 2 December)と述べ、彼のクロムウェルに関する集合的記憶が汚されることを拒絶する身振りを示す。いかにイデオロギー国家装置としての劇場が、単一のナラティブに収斂していく国家的記憶を語ろうとも、それが必ずしも国民の意識の統一に直結するものではないことが、この短い記述から読み取れると言えよう。

Works Cited

Howard, Edward. *The Usurper, A Tragedy*. 1668.

Pepys, Samuel. *The Diary of Samuel Pepys*. Eds. Lantham, R.C. & Matthews, W. 9 vols. London: Unwin Hyman, 1970-76.

アルヴァックス、モーリス『集合的記憶』小関藤一郎訳、行路社、1989年。

ホワイトヘッド、アン『記憶をめぐる人文学』三村尚央訳、彩流社、2017年。

三村尚央『記憶と人文学』小鳥遊書房、2021年。